

熊本地域医療センターだより

通算186号

11月号

院長 杉田裕樹

令和2年(2020年)11月発行

熊本地域医療センター電話番号(代表) 096-363-3311 FAX 096-362-0222

2020

熊本地域医療センター 理念

かかってよかった。
紹介してよかった。
働いてよかった。
そんな病院をめざします。

contents

コロナトンネルの誘導灯……………	P1～2
新館創立20周年特集	
新館創立20周年おめでとうございます…	P2
増改築あればこそ……………	P3
新棟建設時の思い出: ICU(HCU)と緩和ケア病棟に関して…	P4

コロナトンネルの誘導灯

看護部長 ^{おおひら} 大平 ^{くみ} 久美



最高気温を記録更新し続けた猛暑も過ぎ去り、マスクで暖が取れる季節を迎えております。皆様いかがお過ごしでしょうか。さて今回は、コロナ禍に於ける看護部の近況を報告させていただきます。

2020年は、看護部にとって幸先のよい幕開けとなりました。と、申しますのも、日本看護協会の「看護業務効率化先進事例アワード2019(厚労省委託事業)」で、当院の取り組み(「ユニフォーム2色制」と「ポリバレンタナス®の育成」による持続可能な残業削減)が最優秀賞に輝きました。1月15日の東京国際フォーラムでの表彰式を機に、他施設やメディアから注目を浴び、全国放送でも取り上げられるほどでした。

この高揚感は、あっという間に新型コロナウイルス感染症(以下、コロナと略)に奪われてしまいました。表彰式と同じ頃、わが国初のSARS-CoV-2の感染者が確認されました。恥ずかしながら当時の私は、対岸の火事のような感覚でした。このような私の緊張感が一気に高まったのは、県内初の感染者が確認された2月の事です。これまでお世話になった方々の送別会も、不安で一杯の新入職者の歓迎会も、コロナが持って行きました。

感染拡大防止に向けて奔走する中、次年度の採用計画に暗雲が立ち込めました。最短距離で採用に繋がる看護学生さんの実習受け入れができなくなりました。メディア主催の就職説明会も中止になりました。が、ポーっとしているわけには行きません。保有率90%越えのスマホを活用して、看護部の取り組みを動画でアップしました。厚労省や看護協会のホームページには、既述したアワードの特設サイトが設けられ、当院の取り組みが広く紹介されました。これらの影響か、例年になく、多くの方々の受験に繋がりました。採用面接では、最優秀賞受賞について触れる人もいました。その場で「合格!」にしたいとなりました(ご心配なく。合格基準を遵守します)。

コロナは、これまで普通に行ってきた「ケアのあり方」の見直しを迫りました。業務の効率化になくてはならない、ポリバレンタナス®にも行動制限が加わり、看護部活動の特徴である「協働」が、自粛を余儀なくされました。コロナは様々な変更を私たちに求めてきました。が、そもそも、業務改革は看護管理者の役割です。コロナ禍にふさわしい方法で、粛々とそれを遂行すればいいのです。脆弱な組織は危機的状況に置かれると、その脆弱さが露呈します。看護部は決して脆弱な組織ではありません。「看護部の使命は病院理念の具現化に他ならない」

「ひとつ屋根の下にいる患者さんを皆で見る」と、看護部長就任時に心した言葉は、今では看護部の合言葉になっています。患者さんに「かかってよかった」と思っていたかのように、今回新たに看護部BCPも作成し、コロナ禍に於ける「看護サービスの質」を追求し、有事に備えています。

正直申しますと、4月中旬以降、先が見えないトンネルを彷徨っているようでした。でも、その都度、勇気づけてくれたのは、「病院理念」と「病院歌」です。判断に迷ったときは、病院理念に立ち返り、そして病院歌にあるような、「理想」「使命」「誇り」を抱き、栄えある明日を信じよう！と、勇気を与えてもらっています。

「病院理念」と「病院歌」。これは、コロナ禍に於ける誘導灯です。親しみやすい病院理念に renewal くださった廣田先生、組織の一員であることの自覚を高め

る病院歌を作詞くださった故前田一誠先生ありがとうございます。病院朝礼で声高らかに「病院理念」と「熊本地域医療センターの歌」を、みんなで唱和・斉唱できる日を今か今かと待ち望んでいるこの頃です。



新館創立20周年特集



新館創立20周年おめでとうございます

ひまわり在宅クリニック院長 ^{ごとう}後藤 ^{けいじ}慶次（当時麻酔科医員）

平成12年9月に竣工したばかりの新館4階病棟に新設した緩和ケア病棟の初代専従医として13年4月に地域医療センター麻酔科に赴任しました。田上麻酔科部長のもと緩和ケア委員会として看護部とともに準備されてきた期待を背負っての船出となりました。

医師、看護師ともに短期間の研修は受けていたものの誰一人として緩和ケア病棟の経験があるわけで



当時の緩和ケア病棟の家族会の写真

はなく、手探りでの船出です。

患者さん・ご家族へのスタッフの熱い思いがあふれ、毎日いろんなドラマがありました。

お酒の好きな患者さんとは時に酒を酌み交わし、飲ませすぎて転倒させたり、(幸い怪我無く始末書とはなりませんでしたが)、看護師付き添いで1泊温泉旅行に出かけたり。

毎年夏の恒例、新館6階レストランを貸し切って、患者さん・ご家族を招待しての花火大会はとても盛り上がり、皆さん喜んで下さいました。また、クリスマス会では今村薬剤師がマジックショーを開催してくださったり、田上部長の奥様方のトーンチャイム演奏などで楽しみました。

ボランティア養成講座を見ようみまねで開催し、ボランティアの方々にも来ていただけるようになりました。患者さん・ご家族がボランティアの皆さんのおかげでどれだけ癒されたか、この場を借りて感

謝申し上げます。

緩和ケア病棟で苦痛症状が緩和すると自宅に帰りたいと希望される方が出てきました。かかりつけ医にご依頼しても重症だとなかなか受け入れが難しく帰れません。田上部長に無理を言って、地域医療センターから訪問診療を行い、地域の訪問看護師さんやケアマネジャーさん方と連携して在宅で過ごしていただくこと（時には看取りになること）もありました。

結局、在宅緩和ケアの充実を目指し、平成21年3月に地域医療センターを退職、4月から開業する道

を選びました。その後も翌年3月まで緩和ケア病棟の非常勤としてお世話になりました。開業して12年目になりますが、私の在宅緩和ケア医としての基礎は地域医療センター緩和ケア病棟時代にあります。今も安部先生にはいつもお世話になっており、患者さんやご家族の細やかな実情などフランクな情報交換ができて助かっています。

これからの地域医療センターと緩和ケア病棟のさらなる発展を祈念しています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

増改築あればこそ

顧問 きよすみ たけあき
清住 雄昭



1981（昭和56年）病院設立。病診連携と休日夜間急患センターを診療の柱とし、会員の先生方の熱い支援のもと、順調に業績を伸ばし、必然いずれの部署も手狭、窮屈に。（病床は6人部屋が主であった）増改築の必要性が議論され、1998建設準備委員会が設けられ同年10回開催。当時の豊田会長、相良副院長、渡辺理事、井上事務長他多くの方々の尽力により、1999.7新館起工、2000.9竣工。まさに20周年を迎えた。翌2001.3本館改築も竣工。ホテルキャッスルで盛大に落成祝賀会が催された。

2Fに十分なスペース、機能を備えた生理検査室、内視鏡室を移転。内視鏡室は明石部長のセンスで壁、仕切りのないオープンスペースとして設計され各種検査の状況、検査後の患者さんの観察等、全体に目が届き安全性に富み、また専用の透視室を備え、ERCP、ブジー、消化管ステント挿入等いつでも施行可能であり、以後症例も増加し昨年度実績で年間

件数は治療1000例を含む6400例に至っている。3Fにそれまで3ヵ所に分かれていた医局を1室の総合医局とし、より診療科間の垣根の低い風通しの良い医局を目指した。4F、5Fは病棟に。（当時常に満床近い状況で、ICU、緩和ケア病床といった特徴を備えれば増床も可能か？期待されたがこれは叶わず）6Fにレストランを。何度か業者が変わるも1995ナルカフェを開店頂き（県民百貨店閉店に伴い）職員、患者、家族に快適な憩いのスペースと親しまれている。ホールも新設され院内の集まりのみならず、会員の先生方の勉強会等に広く利用されている。

さてこの20年間、曲がりなりにも単年度黒字収支で診療を続けて来られたのは、この増改築あればこそと存じます。当時と医療情勢は大きく変化し、地震、コロナ禍等の難題もありますが、来秋には創立40周年を迎えます。当院がこれからも生き残っていくためには新病院建築、新館新築が必須でありましょう。早期の具体化、着工を切にお願いする次第です。

熊本地域医療センター勉強会のお知らせ

11月・12月の勉強会は開催いたしません。来年1月は開催を予定しております。

新棟建設時の思い出: ICU(HCU)と緩和ケア病棟に関して



東京医科大学麻酔科学分野特任教授・緩和医療部部长 たのうえ ただし **田上 正**
(当時麻酔科部長)

1996年になり熊本地域医療センターの増改築計画が立ち上がった。自分は建設委員会に入り職員の見解をまとめる立場になった。新棟の1階に協力医当直室、事務部の一部移転と在宅ケアセンターの設立、2階に検査部門の一部と内視鏡センターの移転、3階に医局および管理部門の移転とともに、4階が緩和ケア病棟、5階がICUのある新しい外科病棟、6階に多目的講堂とレストランを設置することになった。2000年9月ハード完成した。

ICUは当時の日本集中治療学会から出された認可ICUの基準を満たすように努力した。全国ICUの平均的な部屋の広さやコンセントやガスや吸引のパイピングの設置数を調べて参考にした。基準認可ICUでは医師が常駐できる施設(当直室)も必要になる。ソファベッドを入れて、何とか基準はクリアできるようにした。専用面積が最初から制限されており、狭い空間をいかに有効利用できるかが問題であった。診療各科や看護部の協力を得てICU運営委員会も立ち上げた。吉田節子師長には看護スタッフの教育などご苦労させた。人工呼吸器のみならず、血液浄化装置や心肺補助装置なども必要になる。幸いに清水潔臨床工学技士を採用することがで

きた。最初は「なんちゃったってICU」と揶揄されることもあったが、次第に大手術後や院内急変、救急外来からの蘇生後の患者などが入るようになってきた。

緩和ケア病棟の設立には看護部の全面支援を得た。新棟4階の全フロアを緩和ケア病棟に利用できるようになり、看護部の担当者といろいろな施設を見学に行き準備を進めた。在宅診療医として活躍していた後藤慶次医師を緩和ケア病棟専従医として招聘できた。2001年4月から緩和ケア病棟届出施設となり、実際の運用は同年7月から始まった。麻酔科の高群博之先生には主治医も含め大変お世話になった。大平久美師長をはじめ看護スタッフの献身的な看護にはいつも感謝していた。ボランティアの受け入れ、季節の催し物、遺族会など苦労はあったが今では懐かしい思い出となった。シャワー・トイレ・ミニキッチンのある有料個室5床、無料個室1床、4人部屋の緩和ケア病棟で、病床利用率を80%以上確保することを目標に土日の急患も受け入れるようにスタッフと共に頑張った。熊本大学病院からの紹介が増えたこと、救急外来での終末期患者急変への対応ができることから次第に入院患者が増えてきた。

熊本地域医療センター

- 医師へ直接紹介される方はこちら
☎096-363-3311 (代表)
- 何科に紹介するか迷っている場合はこちら
※ベテラン看護師が対応いたします!
(平日9:00~17:00) **☎096-372-0600**
- 画像診断・内視鏡などの検査予約はこちら(連携室)
☎096-366-1323

編集後記

- Y 先月10月号を送付して間もなく、医局の大先輩より「センター便り、よかったよ」とお電話をいただきました。担当者に連絡して感激を分かち合い、励みになりました。今月号に執筆いただいた先生方も、大学部活・医局の先輩です。執筆を快諾いただきありがとうございます。
- K 田上先生、後藤先生。原稿依頼を快くお引き受けいただき、ありがとうございました。20年前にタイムスリップしたようで、懐かしい記憶がよみがえりました。病院朝礼での「熊本地域医療センターの歌」斉唱。田上先生の声高らかな美声を思い出しました。
- H 原稿を依頼させていただいた皆さまからはお忙しい中、快く寄稿していただき誠にありがとうございました。私の知らない歴史が詳細に書いてあり、昔の熊本地域医療センターを知ることができました。